

《令和元年度日本薬剤学会「薬と健康の週間」
懸賞論文審査結果》

テーマ：「令和・新時代に挑む薬学」

第1席：坂口貴俊（金沢大学医薬保健学域）

第2席：芦原まいか（静岡県立大学薬学部）

第3席：徳吉泰春（静岡県立大学薬学部）

「令和・新時代に挑む薬学」

金沢大学医薬保健学域薬学類6年 坂口貴俊

6年制課程を卒業した多くの薬剤師は、何の迷いもなく就職する。就職後は患者中心の医療への貢献が求められることになるが、果たして、自分自身が医療にどのように貢献していくのかを具体的に説明できる新卒薬剤師は何人いるだろうか。また、中堅薬剤師が臨床現場で何か「治療方針に違和感」を感じた際、その「違和感」を問題として定義し、解決に導くまでの道筋をつけられる人はどれだけいるだろうか。もちろん、薬剤師の中にはそういったことができる人がいることは間違いない。しかし、全ての薬剤師が問題を発見し、その問題の解決に向けて計画を立て、その都度軌道修正を加えながら計画を完遂させ、得た解決法を世間に伝えられる能力を持ち合わせているわけではない。

では、そうした能力はどこで習得できるのだろうか。課題に気づき、その解決に向けた仮説を立て、その裏付けのための情報を収集し、最終的に臨床応用する過程はまさに研究である。このような研究を全うする能力と経験なしで、令和時代にこえる薬剤師能力を備えることはできないと自覚すべきだと考える。そうした上で、不足する能力を習得するための一つの手段として、博士課程への進学を提案したいし、私もその道を選んだ。

博士課程では研究と向き合うことで、研究に関する専門的な知識と研究を遂行するために必要な能力を得ることができる。しかし、その能力は必ずしも研究にのみ活かされるものではない。例えば、ある研究テーマについて、過去にどこまでが解明されていて、何が未知でかつ研究するに値するのを見つけて出す問題発見能力は、臨床現場で当たり前のように実行されている事柄について疑問を持ち、その有効性を検証してみるといった場面で活用できる。こ

の場合、問題発見能力により最初の疑問を持つことができる。また、計画的に研究が進むようにマネジメントする能力は患者のケアプランを立案し、実行していく過程に応用できる。日々変わりうる患者の状態を考慮しつつ、できるだけ早く快方に向かうように計画を練ることができる薬剤師は、社会と患者に必要とされる。さらに、世間に研究成果の重要性を知らしめるためには論理的に結果を解釈し、誰もが納得できる結論を導出した上で、誰にでもわかるように説明する能力が必要であり、その能力は薬剤師の本業である服薬指導でも必要な能力である。この能力を極めた薬剤師による服薬指導は、患者のアドヒアランスを著しく向上させるだろう。もちろん、博士課程ではここに挙げた能力以外にも薬剤師として生きていく上で必要な数多くの能力を身に着けることができるし、博士課程以前に習得した能力の質を向上させることもできる。一方、専門知識についても自分以外の誰も知り得ないことを知っているということはそれだけで価値のあることであり、社会的に見てその人の価値が高まるのは必然である。

したがって、基礎研究にしか役立たないと思われがちな博士課程で習得した知識や能力の応用範囲は限りなく広く、令和時代において薬剤師がさらなる飛躍を遂げるためには、博士課程を修了した薬剤師の存在は絶対的に必要である。よって、薬剤師は博士課程への進学を考慮すべきである。

最後に、私自身の理想とする薬剤師像について述べたい。現状、チーム医療において薬剤師は他職種と比較して肩身の狭い思いをしている。それは、先人達の血のにじむような努力によって最近ようやく病棟薬剤業務実施加算が算定され、病棟薬剤師の数が拡充された一方、まだまだ他職種と比較して圧倒的にその人数が少ないからであろう。しかし、このような状態を長引かせてはならない。令和時代の薬剤師はもっと積極的に自己主張をして、その能力を他職種に示していかなければならない。私は、そのような薬剤師を理想とし、まずは博士課程へ進学して理想を実現するために必要な能力を身に着けようと考えている。

「令和・新時代に挑む薬学」

静岡県立大学薬学部5年 芦原まいか

薬剤師の使命は、全ての医薬品の適正使用を担保

し、国民が健康な一生を送れることに寄与することである。そして薬剤師は適切な薬物治療を実践するために、薬の専門家として医療チームに参加することを目標としている。薬学部6年制教育を受けた世代が実践的な対応ができるようになり、第一線で活躍するようになると、ますます臨床現場での薬剤師の発言権は高くなり、経験を積んだ薬剤師の言動は、医師やコメディカルスタッフから尊重されるようになってくると考えられる。これからの新時代における私の10年後を見据えた姿を2つ紹介したい。

1つ目は、技術が進歩しているからこそ、患者の感情を受け止め、問題解決に導くために必要なコミュニケーションスキルを自分のものとする薬剤師になることである。AI技術やICTを活用した情報支援システムが拡充し、病院薬局間での診療情報等の共有も広く行われ、薬剤師がより簡単に医療に参画し発言することができるようになり、また、簡便に患者の入院前の薬物治療を把握することができ、そこから医師への処方提案も一般的に行われるようになる未来を想像する。ここで注意したいことは、添付文書などに書かれたものに従い患者を直接診ずに医療チームに発言することにより、患者の病状が悪化してしまうというリスクである。このリスクを回避し、薬物療法の質を高めるためには、投薬後の患者の状態を対話や容態の観察などから把握し、適切な治療を提案していく意識を忘れてはならないことを肝に銘じていきたい。それには、患者に寄り添うことで言葉の裏に隠れた本音や欲求を引き出し、抱えている矛盾した感情を認識させ、共に解決していくことが必要であると考え。そのために、患者のバリアを外し、信頼関係を構築できるようにコミュニケーションのスキルアップを図りたい。

2つ目は、先進的な“治療”に目を向けるだけでなく、“予防”にも焦点をあてた薬剤師になることである。健康寿命と平均寿命の差を減らすことを目指すため、増え続けるメタボリックシンドローム該当者やその予備軍の数を減らすため、あるいは医療機関への未受診者の疾病の悪化を防ぐためにも薬剤師による早期からの介入は重要である。これからの時代は、薬局での血圧、血糖値、HbA1C、中性脂肪の測定のみならず、腎機能や肝機能などを計測できる検査機器の設置が広まると同時に、生活習慣病などの“予防”の概念が人々の間に浸透していくこ

とを期待している。それにより健康相談を目的に薬局を訪れる人の数が増すことだろう。会話からの情報だけではなく、臨床的データも加えることにより、的確な臨床推論を行うことに繋がる。そのことが受診勧奨や薬学的・保健的指導といった、より患者にあった対応につながると考える。予防医学の発展と共に、それらを学び活用していくことが大切である。病気になる前に関わる機会がある薬剤師だからこそ、未病または初期段階からアドバイスできることにより、ヘルスリテラシーの向上に寄与できる。薬学的視点から一般用医薬品・健康食品・サプリメントの推奨を行うだけでなく、食生活・運動習慣・禁煙の指導なども行えるようにならなければいけない。薬や検査値などの知識の習得だけではなく、これらの指導を総合的に行えるようになりたい。

私たち学生は、これから医療・臨床で使用される知識や技術を極め、医療現場で活躍するためにスタートラインに立つ。臨床現場だけでなく、様々な専門職に就き、共に新たな世を担う。その中で、私は時代の変化に柔軟に対応できる経験豊かな薬剤師となり、臨床の現場で活躍したい。常に、求められる医療に参加できるように生涯学習を続け、治療や予防を望む人々に信頼される最高のサービスの提供を行うことを目標としていく。

令和の時代になっても、薬剤師の使命は変わらない。日本のみならず世界中の人々の健康に貢献したい。

「令和・新時代に挑む薬学」

静岡県立大学薬学部5年 徳吉泰春

臨床から研究への架け橋となる「医療のコンバータ」、それが私の目指す研究者像である。患者の目線に立って本当に患者の求めていることを考えることのできる薬学探求者だ。

平成では平均的多数を対象とした医療が発展したのに対し、令和では個人を対象にした医療が隆盛に向かうだろう。そのような変遷期の中で、個人の求めるニーズが研究現場で課題となるとは限らず、臨床と研究でニーズに対する認識のズレが不幸にも生じるかもしれない。半年間の実務実習を通じて、患者やその家族の求めるニーズは多種多様にわたるにもかかわらず、その多くが充足されないままであることを学び、その原因は「医療のコンバータ」が

不足しているためであり、今後ニーズに対する認識のズレは増えていくと確信した。さらに、患者の抱えている不安や期待に触れたことで、自分の研究に対する責任と使命を強く感じるに至った。

実務実習中に薬の使用に際して様々な問題を抱える患者に話を伺い「医療のコンバータ」が不足していると感じる状況に直面した。病院での実務実習中に話をしたがん患者は、体調次第で食べたものを吐いてしまっていた。胃がんの治療のために胃を全切除していたからである。その患者は「大好きな食事ができないのが一番辛い、死に近づいているのが分かる」と仰っていた。「日本人の死因第一位はがんである」と学んではいたものの、普段の生活ではがん患者と話す機会ほとんどないため、がんと闘う患者やその家族の悩みや苦しみを初めて知ることとなった。臨床現場でがんを戦う患者の姿を見て、アンメットニーズの解消に向けて使命感を胸に抱き、日々の研究に真摯に取り組みたいと感じた。

病院の臨床現場だけでなく薬局での服薬指導でも「医療のコンバータ」が必要であると感じた。薬を受け取りに来た慢性腎不全の患者はクレメジンを含む4種類の処方薬を全て同時に服用していた。クレメジンは他の薬剤を吸着し、吸収を阻害するため、併用薬がある場合には時間を空けて服用することが添付文書上に明記されている。しかし、この患者は79歳と高齢であり、薬剤に対する理解力が低かった。私は薬学部実習生として患者に服用意義と用法を説明し、理解して頂いた。一方で、研究者として製剤学的アプローチを用いて放出時間をコントロール

し、多剤との同時服用可能な薬剤を開発することで患者のコンプライアンス向上に繋がると考えた。大学での研究だけでは気付くことができなかった研究ニーズについて臨床現場を実際に体験することで知ることができた。

現在私は研究活動を通じて研究手技および知識を獲得し、研究者として活躍するために日々研鑽を積んでいる。大学での研究は必要な理論や技術について深く学ぶことができる一方で、医療現場と関わる機会が少ないという現状がある。以前の私は研究者として活躍するためには、臨床現場を深く知ることは重要でないと考えていた。しかし、実務実習における患者との会話や服薬指導を通じて、臨床現場には未だ解消されていない些細なニーズがあることを学んだ。その際、研究成果を実証するために臨床現場があるわけではなく、臨床現場での問題を解決するために研究をしているということを再認識し、臨床での問題に基づき研究について考えることの重要性を実感した。

大学での取り組みだけでなく、臨床現場にて患者と接し、臨床上の問題について考えることで、ニーズに対する嗅覚を養うことができると感じた。また、患者の想いに触れたことで、新たな価値を生み出し人々の生活に貢献する、研究者としての責任を認識することができた。実務実習を経験し学んだ患者主体の考え方を活かし、「医療のコンバータ」として、臨床のニーズを的確に捉えた研究を行い、令和とさらに次の時代を見据えた薬学探求者に私はなる。